

松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく畠』の紹介と翻刻（1）

On "Kikubatake" by Yukihiko Sanada, 6th Load of Matsushiro Domain (1)

平林香織 Kaori Hirabayashi, 小幡 伍 Atsumu Obata, 玉城司 Tsukasa Tamaki

はじめに

松代藩十万石第六代藩主真田幸弘（元文五年（一七四〇）～文化一二年（一八一五）七十六歳。俳号菊貫・白日庵他。以下俳号により菊貫と記す）は、漢籍、和歌、俳諧、紀行、書画に分類される膨大な文芸資料を残している。中でも、『菊の分根』または『菊畠』と名付けられた一七〇点を超える点取俳諧資料は、九百巻九万句に及ぶ。明和九年（安永元年）（一七七二）の『菊の分根』一冊一六巻から、文化一年（一八一四）中の『菊はたけ』四冊二一巻までのものが現存し、平均すれば、年に一〇回以上の点取俳諧を興行していたことになる。点者には江戸座の俳諧宗匠のはか、文化年間には雪中庵完来など雪中庵系俳人も加わり、点者が百韻につき百名にのぼる巻もある。なお、菊貫は、明和・安永期ころ、高太初や大島蓼太にも師事しており、蓼太が裏書をした文台が、松代文化施設管理事務所（真田宝物館）に伝来する。^①

その治世は、宝暦二年（一七五二、二三歳）から、寛政十年（一七九八、五九歳）までの四六年間に及ぶ。藩主の座についてすぐには恩田木工民親を勝手方家老に登用、恩田木工は、役人の不正を正し、儉約に努め、藩政を刷新した（宝暦改革）と言われている。

菊貫は、儒学者菊池南陽を松代に招聘し、藩士の教育活動に力を入れた。また、和歌を賀茂真淵に学び、真淵の弟子大村光枝を京都から松代に招いている。真田昌幸・信幸・幸村以来「武の真田」として名を馳せた真田家であるが、菊貫の事績は「文の真田」としても面白躍如たるものである。

菊貫の文芸資料については、早く福井久藏によつて、「一巻に収むるもののみにてもその数すくなからず、その全部に於ては甚だの数に上る」こと、また、「当時名たる俳師」「諸侯」が一座していることが紹介されている（『諸大名の学問と文芸』昭和一二年五月、厚生閣）。本格的な紹介としては、俳諧紀行を翻刻した玉城司・伊藤善隆の「翻刻 菊貫著『旅つゞら』」（『研究と評論』56号 平成二年六月）、「翻刻 青葉陰」（『研究と評論』59号 平成二年三月）は菊貫の追悼句集の紹介・翻刻を行つたもの。

号 平成一二年一二月）がある。その後井上敏幸・西田耕三らが、平成一七年から科学的研究（基盤研究B）「近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究」（課題研究番号17320040 研究代表者井上敏幸）を実施し、菊貫の年賀集を雑誌『松代』¹⁷号（平成一五年三月）～21号（平成一九年三月）に五年間継続して掲載した。なお、井上らの科学的研究の成果は『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究』（論文編・資料編 第一部）（平成二十年三月）にまとめられている。

以上のような研究成果に基づき、筆者らは点取俳諧資料を調査・研究の対象として、同時代の真田家文書『御側御納戸日記』等との連関を入れつつ、新たに科学的研究（基盤研究C）「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」（課題研究番号22520252 研究代表者玉城司）を開始した。

本稿は、その端緒として、松代文化施設管理事務所（真田宝物館）収蔵の『菊畠』を翻刻するものである。目録番号4／1／1の『菊畠』（四冊）享和元年（一八〇〇）～三年（一八〇二）に卷かれた二七巻二七〇〇句である。紙数の関係でここに第一冊九〇〇韻のうち第五までを翻刻する。

（注1）文台の裏書は次の通り。

松代の君昇進させ給ふ折から飛田の国人より贈たる一位のときにめでたければ発句得て祝し奉けるを願て御もの数寄の文台に造らせ給ひてうら書きせよとあふせ事のありければ

おもしろきはつ日やこゝを位山 蓼太

（注2）菊貫の俳諧一枚摺に関するものに、雲英末雄「俳諧一枚摺について」「真田菊貫の俳諧一枚摺」（『書誌学大系84俳書の世界』平成一二年、早稲田大学文学部）、玉城司「真田幸弘の俳諧一枚摺」（『江戸文学』25号、平成一四年六月）がある。井上敏幸「翻刻 ちかのうら」（『松代』16号、平成一五年三月）は菊貫の追悼句集の紹介・翻刻を行つたもの。

翻刻『きく島』

【書誌】（近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文
及び諸芸に関する研究 資料編第二部）（平成二十年三月）
による。）

真田宝物館整理番号・題名 4-1-1-1・きく島

書型・装幀・料紙 大本 縦二六・九糸、横一八・六糸 袋
表紙・題簽 砥粉色無地 原書題簽、左肩無刃打雲「享和元
西同二戌きく島 他連 乾」
料紙・丁数・行数 本文共紙 全91丁墨付91丁 7-8行

【凡例】 1 旧漢字・異体字は大旨原本の

通りとした。

2 朱書はゴシック体で記した。

判読不能箇所は□で表した。

4-1-1

享和

西戌亥

他連 四卷 秩題被

享和酉戌亥

菊島 四卷 付箋

4-1-1-1

享和元酉同二戌 他連

きく島 乾 表紙

百員 子鷹 陸馬 冬映 得器 双鳴

佛外 石鯨 吾山 崑山 為大

百員 蚊水子 凉山子 素外 李岱 陸馬

甘棠子 甲長子 得器 癸生 為大

百員 蚊水子 凉山子 得器 得友 立志

素丸子 霞外子 左簾 古梁 器觀

鶯嬌子 厄言子 紫鳳 冬映 退住

百員 錦車子 仙峨子 子鷹 檻雲 雙鳴

甲長子 亀文子 富屋 荘秀仙

珠成子 甘棠子 百珉 沾山 癸生
石鯨 為大陸馬 佛外 吾山 1才

百員 環川子 冬英 陸馬
百員 如柳 花篠 徒柔 兮友 一漁
百員 崑山 陸馬 石鯨 得器 立志

百員 崑山子 冬央子 亀文子 陸馬 為大
升来子 崑媛子 宝井 冬映 石鯨
百員 子鷹 李岱 百珉 雙鳴 未明

東寓 春色 癸堂 崑山 紀逸
為大 陸馬 佛外 富屋 百化 1ウ
陸馬 冬映

壬正月廿五日 青山持子鷹
得器 双鳴

暮の月明爐裏に渋茶ことくと
見晴の高き所の風の尚
久しき沙汰の新地開発
飛て竈馬の鬚の長さよ 3才
ウ

七五一七七七十三七五七

一五一七二一五五一一

九五五五五五二五七一

一五一一一一五

衣くのわけてつれなき旭影 如圭子

月代も剃る醫師の惟光 有斐

浮名包めと船も出て行 芦風

一五一十五一七二三

蜀魂聞た咄の耳と口 菊貫

一五七一五一一一一

座頭の取てまはす別荘 梅足

一七七三二五五一五五廿

素機嫌の内に見置床鋪 馬隱 3ウ

俳諧連哥百行

催主 青山

得器 双鳴

南部坂持 佛外 吾山 為大 2才

石鯨 崑山

子鷹兎堂 陸馬 雙鳴 得器 石鯨 佛外 崑山 吾山 為大

付箋

家ちかく鳴立つ 雉や朝のほと

(点判読不能) 2ウ
堰の草に余る雪解

一一一一一三一三一一
長閑なる空に遠路誘れて

一一一（点判読不能）						
笹湯仕廻ふてかそへ日をしる 夜をこめて尼も手傳ふしきせもの 舟のつかぬは吉原の疵 敷藁もうかと踏れぬ深ぬかり 昼も朧に月の傾く 枝ことに結ひ捨たる花切手 一荷の覗ミな買て遣る	牛如	午睡	完路	午睡	雲牙	芦風
十五五五三七五一五五	是非とも碁盤出せる春の雨 月もあり／＼霞籠る夜 産声にほつと息する一家中 屋舗育のまつも張り臂 鉢に雪筈も建た後の肴	フ	フ	フ	フ	フ
十七十五十五一五三五七一	内々御意も有りし禁盆 中入は程よく暮て鳥帽折 さいかち虫の髪で書も讀 花は今盛りと思ふ宵の月 名もなき橋に立し陽炎	如圭	有斐	如圭	子絃	有斐
二二一二二二一一二一						
一五三七十五一七七一	十五五五三七五一五五	世の中へ撞ねと響く三井の鐘 勘当調度當る厄年	十十十一五七一五一七	一一一七一一五一七五一	一一七一一五一七五一	内々御意も有りし禁盆
三夫婦の末の夫婦か雛立て 汐風巻て浦賀より文	三夫婦の末の夫婦か雛立て 一七一一二七七一五 青くと富士の生れし臯月晴	三樂	二ウ	二ウ	三ヲ	十ー十五十五一五三五七一
五十五七五七七七十五十 一五五十五五十五五五七	五十五七五七七七十五十 一五五十五五十五五五七	有斐	如圭	如圭	有斐	内々御意も有りし禁盆
菌取馬におつ開く門 一七一七一十一三一七	七五一一七一五五十一 根付時計の日が暮て居る	子絃	梅足	梅足	芦風	芦風
醉醒に甘露ハしらす水の味 其角か癖を唄ふ新造	一五七三十五一五十五三 一五一一一七一一十八	完路	午睡	午睡	午睡	午睡
占にかくした年に氣も付す 一七二七十五十五十□	一五一一一七一一十八	牛如	芦風	牛如	芦風	牛如
桜と寺の遠い本町	一十八十十田+十八一一三	牛如4ウ	牛如	牛如	牛如	牛如
		完路	三樂	三樂	三樂	三樂
		子絃	有斐	有斐	有斐	有斐
		如圭				

一 玉の免も指覗く窓 十七七十三七一七十五	三ウ 袖を留たて遠ふ風俗」 一一一五二一五一一二一	御 呉服やの荷物に傘を頼みけり 一五一七一七五廿七五七	御 馬隠 梅足 雲牙	如圭 長き日を五段の舞の手に暮て 一五一七一十十五七十五	ナヲ 汚れぬ據にうこく陽炎 一五五一二一五十五三十	如圭 長き日を五段の舞の手に暮て 一五一七一七五七三七
フ 有斐	完路	子絃	雲牙	馬隠 梅足 雲牙	馬隠 梅足 雲牙	馬隠 梅足 雲牙
七三七十八五十三一五五一 下女か寝覚は葛城の神	朝の月影ありくと豊さよ 一五一七一十五三七 千石船に露をもつ稻	御 禰分ひらりと鯉の俎板 一七五一七一七十三口口七	牛嶋のむこふ今戸は浅間山 一五五一七一七十三口口七 不拍子に拍子きかする牽頭持	午睡」8ウ 午睡 午睡	如圭 如圭 如圭	如圭 如圭 如圭
五十五一十五一十五一五一 さすか又他國の秋の身にしみて	一 雇ひ禿に狐の相 一一一一一一一一 艶に見へてやつる恋病	子絃 一 得器	雲牙	馬隠 梅足 芦風	子鷹 子鷹 馬隠 梅足	子鷹 子鷹 馬隠 梅足
七一十七一五一一一三 饗多き花の此ころ	一 雨風の能調て月の秋 一一一一一一一七 山の屋舗は艸の花原	佛外 石鯨 四十三点子絃	佛	難歩持 三千九、午睡 三十、午睡 三十二、公	発堂 五十四点三楽 二十九、三樂	三千九、午睡 三十二、公 三千九、午睡 三千九、午睡
			フ		得器 四十四、完路	得器 四十四、完路
					10オ 三四四、梅多里」	10オ 三四四、梅多里」

嵐山 四十一点子絃	三十四、蘆風	11才
吾山 四十三点午睡	三十九、三樂	
吾山 四十三点午睡	三十八、午睡	
吾山 四十三点午睡	三十八、完路	
為大 四十五点馬隱	三十四、公	
為大 四十五点馬隱	四十八、三樂	
亥閏正月	三十八、雲牙	11ウ
百行稿	十吟八句言 月花折二点増	
升来子持	蠶水子	素外
升来子持	涼山子	得器
此方持	甘棠子	兌堂
(白紙) 12ウ	甲長子	陸馬
二月四日満尾	白日菴	為大
旅の氣になりすましたる霞かな		
今をさかりに咲る菜の花		
春の雨煙艸のしめり加減まで		
調法からる、小細工の好き		
此度は打て替たる住居かえ		
犬の覚のよきに感する		
二人寄みたり集る月の友		
秋かせふくむふみの讀さし	13才	
甘棠子 甲長子 兑堂 陸馬 為大 升来		
子蠶水子 持涼山子 素外 得器 古梁李		
岱「付箋」		
ウ		
吳竹に斟酌らしきわたり鳥		
素文		
一 一 三 五 一 一 一 二 五		
よい器量誉れは白眼かへされて鶴媛		
笑ひにたこの入りし新造		
一 一 五 十 七 七 五 + 七 +		
恥しき坐頭に年をあてられて		
一 五 三 一 十 八 一 七 一 十 五 七		
雪をさかなに酒酒をのむ		
升来		
素飛		
衆道も武備も流行御家中		
菊貫		
虚無僧の姿には似ぬなまり言訛		
一 五 一 一 三 一 五 一 十 七		
于廻かさる石町の鐘		
雲牙		
さはつたら手のきれそふな初松魚		
太路		
元気の汗を拭ふ福から		
馬隱		
遊ひ入る子に居風炉を水にして		
梅足	13ウ	
財布ほといて届状出す		
牛如		
一 一 五 七 + 一 三 一 二 七		
真先へ才藏市の大べざい		
雲牙		
夢話行しやう釣された亀		
馬隱		
遊び入る子に居風炉を水にして		
梅足	13ウ	
起くの目に月の涼しき		
太路		
靈宝に変して讀ぬ万狐の手		
霍媛		
一 一 十 五 一 一 五 五 七 五		
もの思ひしこきたらりと立姿		
櫻のうちはなまくさい寺		
五 一 七 一 五 三 七 七 五 五		
朝夕は春の扇をわすれかち		
木寄した日に木曾山の咄して		
一 七 五 四 五 七 三 七 一 五 一		
蠶にこまる巡見の宿		
馬隱		
一 五 一 一 五 一 五 三 七 七		
櫻のうちはなまくさい寺		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
朝夕は春の扇をわすれかち		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
梅足		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
朝夕は春の扇をわすれかち		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
牛如		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
朝夕は春の扇をわすれかち		
雲牙		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
牛如		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
雲牙		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
フ		
一 一 一 一 一 三 一 一 一		
蠶にこまる巡見の宿		
フ	15才	
菊貫		
馬隱		
太路		
油壺さけてふら／＼戻り牛		
升来		
素飛		
一 一 一 七 + 三 五 三 五 三 五		

十一 一一一七一三一一三	佛法に入る大津絵の鬼	素文	一一一三五一五五	長普請釘の符帳も聞おほえ	牛如
一一一七一三一一一	姿見にへらむ惜氣を解かゝり		十五 十五五五一五十五二	牡丹に甘日酒許す寺	太路
一一七七十三七十七五	酔せた跡か怖い御妾	升来	五 一五一十五十五	智恵競とふと若衆を振向せ	菊 貫
一一五三一一七三三一	釣る幟に丈の低いを嬲られて	鶴媛	一七五 一七一十五十五	結句嘶のかたい相ほれ	馬隱
一一一一一一五一	涼敷風の真直くに来る	素飛	五三五 五七一一一十五一	謡まで小聲にうたふ内祝ひ	梅足
五三一一一一一一二七	漕きやうの用なさそうな遊山舟	升来	一七五 一七一十五一	隠し藝しやと見ぬふりてみる	素文
一五十一七七七一二一	揃ふ樂器の氣もあふた友	菊貫	五三五 五七一十五十五	慎重の温泉場帰らぬか又病ひ	馬隱
三五一一五一五一	黄金の光たふとき西東	雲牙	㊀㊁㊂㊃㊄㊅㊆㊇㊈㊉	月かけてする菊に丹残	鶴媛
一一五一一一一一一	のとかに睡気さそふ講中	フ	一五一三七十七一五五九	関取のかしこまるのも只てなし	升来
一一五一一一一一一	あらそひの皆われかちな月と花	フ	一五一一 一五一一	いたまた薄着の肌寒きころ	菊 貫
休さへ知れぬ春雨の日に	三 一五七七五五五七五	フ」16才	一十五 一七七五七五七	からかへはきかぬ氣になる男の子	太路
手枕に肘の汚れを笑れて	升来	三ウ	一七十五 一七一七一七一	馬隱	菊 貫
一一五七三三三一十八七	素文	一 一十五 一五一一一三一	猪牙よりも心の駒の足はやき	からかへはきかぬ氣になる男の子	雲牙
醉はさつはり居續の夢	素飛	一 一十五 一五一一一三一	女あるしの様な別荘	霍媛	梅足
生靈出来不出来ある雪催ひ	素文	一 一十五 一五一一一三一	掃出して四ツから過か衣かえ	太路	馬隱
かまひの見ゆる衛士かたぶく	雲牙	一 一十五 一五一一一三一	盃らしく無い峯の松	十八	全
		一 一十五 一五一一一三一	胴揚に惚人の胴は抱かねて	五 一五七三三十七二	鶴媛
		一 一十五 一五一一一三一	長くくと振袖の欲	一 一五七三三十七二	

あつさりと見えし祇園の柱立	素飛」 18ウ	甘棠子四十六点太路 三十五点雀媛子	三月十六日」 22才
竹田細工も跡は人形	素文	甲長子五十五、太路 四十三点、牛如	享和元年三月十六日
郭公産屋の伽の聞出して	太路	兌堂七十二、菊貫子 四十一、升来子	誹諧之連歌」 22ウ
一五一三三一三一一	雲牙	四十、梅足	(* 23才より31ウまでの第三の百韻は、44才から53ウまでの第五の百韻と同一である。ただしこれには点者として蛭水子が筆頭に加わっているので、第五のみを掲載する)
雨にひそく連哥初まる	梅足	陸馬三十九、梅足 三十八、太路	
一五一一一一七一五一	太路	三十三、升来子 四十六、升来子	
立居まで室町風の流石文	梅足	為大六十六、公 四十五、模足	
一五一一一一三一一一	太路	升来公持	
按摩の不審はれぬ加梨勒	梅足	蛭水子五十四、雀媛子四十八、升来子 二十六、公	
飛石にはらりと月の露ぶりて	太路	涼山子七十四、霍媛子五十七、公 五十四、梅足	
一五一一一五一一一	馬隱	三十ニ、雀媛子 四十、升来子	
國の便に添て初茸」19才	菊貫	素朴四十一、太路 二十四、公	
名ウ	梅足	得器五十六、升来子四十八、公 四十、雲牙	
一三五一十五五三五一十三	馬隱	古梁五十八、升来子三十五、霍媛子 三十四、公	
相撲取秋のあはれはしらぬ也	馬隱	甘棠子 石鯨 吾山」 32才	
一五五一五一七三五五	菊貫	龟文子 涼山子 得友	
男優りの妻の鉋丁	梅足	珠成子 兌堂	
樽の口きるとこそやのいつも神酒	全	佛外	
一五一一一三一十八一七七	牛如	甘棠子 沾山	
存在しらすの和布刈見に立	菊貫持	為大	
五七一十五一一一一一	霞外子	陸馬	
渡し守謡のやふな咄して	素磨子	催主難歩坂持	
一十五一一一一一一二十三	古梁		
あらやうかまし醉過に脱く笠	左簾		
一五一一一一一一一二十三	立志		
いつことも限らしはなの真さかり	器觀		
一ム一ムム一一一一一	珠成持		
駒鳥も雲雀もまけぬ朝起	鶯嬌子 冬映 紫鳳		
フ	百韻		
19 ウ			

(* 23才より31ウまでの第三の百韻は、44才から53ウまでの第五の百韻と同一である。ただしこれには点者として蛭水子が筆頭に加わっているので、第五のみを掲載する)

控

甘棠子 子鷹 櫻雲 双魚 富屋 義堂	一五一一
秀仙 百珉 治山 癸堂 石鯨 為大 霧屋	十五一一一三七七五五五五
馬 佛外 吾山 付箋	五一一一一七七五七七五五五五
相撲場のまはしに秋の色見えて 菊貫	五七七五 〔補〕
片倉領にめつらしい年 馬隱	五七一二一一七一七一七七一一
三夫婦の諸白髪なる山深み 花足	五七五一一
娘の機の音の涼しき 大路	一三一二五
千ながら着て来る蓑に綱提て 梅足	三一七五 〔十〕
極樂上戸罪咎はなし 環川	一七一五一
馬駕て疱瘡よけの札もらひ 雲牙」 〔33ウ〕	五十一二一十二一一二一五 一一二一一
阿須波の神へ初旅の幣 有斐	五五一五 一十五五五五十七十
雪兆もなふ師走閏に梅咲て 子絃	二七一一一十五一十一 一一一
丸山の兎美顔もよく覚え 太路	五五一一 〔十八〕五五三十一 一一一
物申に菊の陰から返辭して 菊貫	〔廿〕十七五 十五
大徳の書を紅國の額 遠莫	五一十一三七七五五五
銀燭に狩衣の透く白拍子 柿絮	五一十一三
帰雁鳴行霄の月影 フ	一一一一一
一面に花の盛の時なれや フ	一一一一一
見分の騎射も其日の真手つかひ 如圭	二二一七 〔十八〕三五五 〔廿〕三五一
乳人の側を廻し澤菴 芦風	一一一一七
遁世の夜はからふしき旅まくら 馬隱	二二一五 〔廿〕七十五一一一十七七五 一一一十五五
看病の上手ひそかに笑はせて 梅足	五七七三 〔廿〕一七七八 〔廿〕十一七十三 五十五七五十
三十二相似珠が疵 フ	一一一一一
笙の音もなまめく斗昼の月 フ	一一一一一
山の手遠くおもひ入秋 フ」 〔35オ〕	二ウ
物申に菊の陰から返辭して 菊貫	〔廿〕十七五 十五
下戸で難面き拳の先生 梅足	十五一一一四五三一五五一五五
おしけなく切てくれるも牡丹好 環川」 〔34ウ〕	十七一七七 〔二十〕七一五
百両懸た井戸に鋤前 菊貫	〔廿〕二一一一 〔廿〕一五三一
相場師も絶へぬ淀屋の白鼠 芦風	〔廿〕二一一一十五五五五 〔廿〕十三七五五
煤掃た夜にとつさりと雪 雲牙	一一一五七
看病の上手ひそかに笑はせて 梅足	〔廿〕五七七三 〔廿〕十一七十三 五十五七五十
三十二相似珠が疵 フ	一一一一一
笙の音もなまめく斗昼の月 フ	一一一一一
山の手遠くおもひ入秋 フ」 〔35オ〕	二ウ
物申に菊の陰から返辭して 菊貫	〔廿〕十七五 十五
下戸で難面き拳の先生 梅足	十五一一一四五三一五五一五五
おしけなく切てくれるも牡丹好 環川」 〔34ウ〕	十七一七七 〔二十〕七一五
百両懸た井戸に鋤前 菊貫	〔廿〕二一一一 〔廿〕一五三一
相場師も絶へぬ淀屋の白鼠 芦風	〔廿〕二一一一十五五五五 〔廿〕十三七五五
煤掃た夜にとつさりと雪 雲牙	一一一五七
看病の上手ひそかに笑はせて 梅足	〔廿〕五七七三 〔廿〕十一七十三 五十五七五十
三十二相似珠が疵 フ	一一一一一
笙の音もなまめく斗昼の月 フ	一一一一一
山の手遠くおもひ入秋 フ」 〔35オ〕	二ウ
物申に菊の陰から返辭して 菊貫	〔廿〕十七五 十五
下戸で難面き拳の先生 梅足	十五一一一四五三一五五一五五
おしけなく切てくれるも牡丹好 環川」 〔34ウ〕	十七一七七 〔二十〕七一五
百両懸た井戸に鋤前 菊貫	〔廿〕二一一一 〔廿〕一五三一
相場師も絶へぬ淀屋の白鼠 芦風	〔廿〕二一一一十五五五五 〔廿〕十三七五五
煤掃た夜にとつさりと雪 雲牙	一一一五七
看病の上手ひそかに笑はせて 梅足	〔廿〕五七七三 〔廿〕十一七十三 五十五七五十
三十二相似珠が疵 フ	一一一一一
笙の音もなまめく斗昼の月 フ	一一一一一
山の手遠くおもひ入秋 フ」 〔35オ〕	二ウ
物申に菊の陰から返辭して 菊貫	〔廿〕十七五 十五

七七一五一

禁酒かために僧の取持

馬隱

□ 一一一七十五一五一五七一一
手枕に見透されたる入ほくろ 黒子 花足

□ 一三七一一一十一一七一一十五
七七一七五二十

明るき文に包む温石

環川

□ 七一三一一十七五七十五三十五
五五三五五

孝行の小舅まえて行渡

雲牙

□ 七一一一一五五一一五五一
一一五五十

雨に色ある庭の紫陽花

芦風

□ 一一一一一一一一一一
一一一

月を見ぬ宵は手燭の影涼し

フ 35ウ

□ 五一一一一五一一九一二七五三
一五十一

錦の如くの御意に泣く尼

如圭

□ 五一一一一五一一一一
一一一

連歌にも良雄か筆の行届き

子絃

□ 十十一五八一五七五十五三五一
一一一三

魂すへて雪の居續

遮莫

□ 二一一一一一一一二一七
一一一

もろく寐る大生酔に振きせて

有斐

□ 一一一一一一一一一
一一一

一一三一

辛子に涙持し小坐頭

柳絮

□ 一一一一一五一一一一七一一
板屋根も花の頃とて繕はす フ

□ 五一一一一一一一一一
一一一

雨吹晴らす東風のおもむき

フ 36才

□ 一十五一六五一七一二七五
五五七三

白くと春の鵜川の朝箇

如圭

□ 十五五一一一七一七五五
一三五五

賛機迄も嫁の手一ツ

有斐

□ 七一七一一五五三七一七一
一一五一

連立も同う朝の初瀬詣

柳絮

□ 二七一七一七十一五七五
十三十七五五

馬骨を隠す夏草の丈ヶ

子弦

□ 五一一一一一一一一
一一一

松原を間遠に燈す朱の母衣

遮莫

□ 五七一六一一三一一十十五一
一一五二一

三日つゝいて不二を見る濱

芦風

□ 五七三三一七一五一三七十五七
五十一一二五

姫入支度に口ゑる母

菊貫

□ 一一一一一一一一一
一一一

槌音の波にくたける碇鉛治

馬隱 36ウ

□ 一一一一一一一一一
一一一

歳暮使もいわふ胴あけ

馬隱

笑ふて斗それか福相 梅足

□ 十五十五五十五一十五十七七五
五七十八五十五七五

借切に桜一日なめ、かす

菊貫

□ 五一一二一一一一一一一
一一一

廁に封を付る蜂の巣

花足

□ 一十五一六五一七一二七五
一三一三

蔽入の起ぬ内から隣の子

環川

□ 一一三一一一一二七十一一
一五一一

文頼まれて重い懐

雲牙

□ 一一一一一一一一一
一一一

雲折く月面白き山のかい

フ

□ 二一七一一五五三七一七一
一一五一

紅葉から新酒賣出す出来分限

太路

□ 一一一一三十三一八一一五五
一三一三一

洗髪きのふの髪と思はれす

花足

□ 一一三一一十五一五十二十一
五一三十七

馬隱

□ 七一一四七七三一五一五一 三一一五三	ふる雪になを透通る梅も花 雲牙	綿かつく内侍も曠か踏歌の夜 有斐
□ 二一一一一五一一一一 十五一一一	我手柄ふる勝公事の宿 太路	眼光に色を含むほろ酔 柳絮
□ 一一五五一一一五七二三七一 一七一五七	庖丁もきつて納所のしたり顔 芦風」 ^{37ウ}	青竹に御威光の鶴結び付けて 如圭
□ 十一一一一五七五一五五三七一 一七一一一	蓮見のわたり碁盤持出す 環川	船は捷の膝切の川 子絃
□ 一一一一一一一一一 一五一一一一	川添にいきれの残る朝の月 フ	宮寂て石の華表に苔衣 柳絮
□ 一一一一一一一一一 一五一一十	たをや女をける派手な人質 如圭	まなはん炷て奉納の琵琶 「有斐
□ 十三一一一一八三一一一 一七一二二	乗掛を留めて野上の里のつて 有斐	「馬隠 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一五一一七	歩判て持ては苦にならぬ金 遮莫	不審ものなり下女めかぬ下女 「花足 けしからす犬の鳴たつ月の夜に フ
□ 一一一一一一一一一 一五一一七	此頃は續て空も花曇り	蜀魂聞て其角は噂酒 「太路
□ ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 團十郎を凧て見る郷	子絃」 ^{38才}	逢ふ人ことに長い本復 「如圭六 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 七十五一一一一五一五一 ナ	立派に雪を搔し新宅 「遮莫	帆出しものと熊の皮買 「芦風 不審ものなり下女めかぬ下女 「花足
□ 七十五一一一一五一五一 七七五十一十	加増地の堺上りも花の春	庭風呂に憂しや木曾路の傘さして 「梅足 けしからす犬の鳴たつ月の夜に フ
□ 一一一一一一一一一 一三一一十三	強弓の弦も手練のかけはづし 「子絃	幟の鯉は五月雨の瀧 「環川六 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一五一一十五一七七一十 五七一十三	逢ふ人ことに長い本復 「如圭六 身請してからは咄も少なくて 「柳絮	帆出しものと熊の皮買 「芦風 不審ものなり下女めかぬ下女 「花足
□ 一一一一一一一一一 一一一一	立派に雪を搔し新宅 「遮莫	庭風呂に憂しや木曾路の傘さして 「梅足 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一	此頃は續て空も花曇り	幟の鯉は五月雨の瀧 「環川六 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		帆出しものと熊の皮買 「芦風 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		庭風呂に憂しや木曾路の傘さして 「梅足 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		帆出しものと熊の皮買 「芦風 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		庭風呂に憂しや木曾路の傘さして 「梅足 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		帆出しものと熊の皮買 「芦風 身請してからは咄も少なくて 「柳絮
□ 一一一一一一一一一 一一一一		庭風呂に憂しや木曾路の傘さして 「梅足 身請してからは咄も少なくて 「柳絮

縮緬に似て似す弱き芥子の花	珠成	七七一一一五一十三一七七一一	もの喰ふ事も荒い助太刀	松岡
二十二二一一二一一二一一		二一一三五三五五十一二	宿引の奇麗自慢を言馴て	立葵
禁酒以来初夜しるゝ夏	環川	十五二七七二三三五一五十五七三	氣の付ぬ事の入歯も糸細工	立葵
二二七三七七五十五一一一三		二一一二一一二一一二一一	大孝行の貧も名に立	菊貫
摺小木の足を抱へて鞠子まで	菊貫	一一一一一一一五一一一	推量て公事取捌く國なまり	松岡
二一一十七三一十五一一一三		一一一一一一一五一一一	裏屋におもひかけもなき恋	立葵
破荷の傍に馬はまち／＼	菊貫	五十五七五五二五一七一一五	心の絵圖をあてし造り木	規外
温石も忘れて出し山さくら	素外	七七一七二十五三一一二五五二	泉水に浮める船の姦しき	菊貫
二一一一一一一一一一一一		十五一十五五十五三五十三一三一	寐た生酔に燐も蚊柱	立葵
残りて曇る月のあたゝか	立葵	伽藍に響く一文の音	夫とする相図おかしき月明り	規外
七七一七二十五三一一二二五五二	龟文	二一一一三五七一一一一一	寐た生酔に燐も蚊柱	立葵
京の春よそ目に峠うつくしき	龟文	十五一十五五十五三五十三一三一	藏と子のなくはと見ゆる菊の宿	松岡
十五一十五五三五十五三五十三一三一		二一一一一一一一一一一一	長刀の稽古に櫛を真二ツ	立葵
伽藍に響く一文の音	珠成	二一一一三五七一一一一一	吹入るちよつとひねつて飴袋	規外
二一一一一一一一一一一一		十五一十五五三五十五三五十三一三一	珠成	立葵
吹入るちよつとひねつて飴袋	環川	二一一一一一一一一一一一	珠成	立葵
視けはしかる武蔵玉川	規外	二一一一一七一一三一一十	釋尊髭があらはと思はれて	立葵
二一一一七一一七五四		十五一十五五三五十五三五十三一三一	東風にいよ／＼心いそ／＼	48才
目を除る為に榎や添の木	一步	二一一一七一一三一一一	二一一一一七一一三一一一	48才
二一一一一三三十三一一二		十五一十五五三五十五三五十三一三一	醫者の娘ておかし薫入	立葵
ふと格子からよい風の来る	立葵	二一一一一七一一三一一一	陽炎の足からもたつ汐干狩	菊貫
二ウ		十五一十五五三五十五三五十三一三一	富士見へる宿ハ借家の儲もの	立葵
十五一十五五七一一一一一	龟文	二一一一一七一一三一一一	一藝もつて沙汰のある醫師	立葵
安睡をされては俗な膝枕	龟文	二一一一一七一一三一一一	年ゆかぬう婆を寄てなふりづけ	梅足
一七十八一七一七三七五五三三		十五一十五五三五十五三五十三一三一	一藝もつて沙汰のある醫師	立葵
遣手の鬼をやらふ豆銀	珠成	二一一一一七一一三一一一	年ゆかぬう婆を寄てなふりづけ	梅足
一三一三三一一一一五十五		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
破笠を着て水仙も冬籠		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
十三一五一五五七一一五十五		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
別荘の茶のこち付た寂	梅足	十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
梅足		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
梅足		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
梅足		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
七三一五一七五七七一六		十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
十能かれは火箸か又みえす	松岡	十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川
松岡	49ウ	十五一十五五三五十五三五十三一三一	づか／＼と出すともの場へ背高蜘蛛	環川

三一五十一三五七十七一七一一 曆の下段雨の降体	規外	一七一七十五一一一七一一 紫衣勅許臺子の傳も其序	梅足」50ウ	一一一一一一一一一一一一 けふは誠に近來の空
一一三一七三一五五二七五十五 棟揚の差圖も吉田三位から	立葵	十一五二七五二三二三七一九 座頭の喰て這入木屋町	一步	一一三一一一一一一一一 樓は花に霞まぬ四方の景
一一一一一一一五一 ふたつ取には餅よりハ是		一七一一一二一一五一一五 寐食も忘果たる春の敵		一一一一一一一一一一 壽を奉る山々の春」51ウ
一十一一一一十一一一一一一 呵つたりたましたりして針仕吏 環川		一十一七一三一一一五七五 前帶にして女房ふる姫	梅足	一七一七一一一 右甲乙
一八十八七一十三十七七五二五十五 美人て判じもの、客分ン 亀文		一七一五一十八二五十八五五二二 猪牙つゝ夕なからも砾の川	珠成	一七一七一一一 蜃水子評六十二点 亀文 四十五点 菊貫 四十二点 梅足
一一一一一一一一一一一 夕日の花になまめく其にほひ		一一一一一一七五五一一三 しろ銀ぞくり網の洲走り		一七一七一一一 涼山子評九十点 亀文 五十八点 梅足 四十九点 環川
一一一一一一一一一一一 枸杞の芽こほす橡側の塵」50才	ナヲ	一一一一一一一一一一一 厄言子評四十八点 亀文 三十点 菊貫 二十六点 珠成		一七一七一一一 素麻呂評六十八点 四十三点 亀文 五十五点 亀文 三十二点 菊貫
一一五五一十五一一五七十五三 うなる土佐まつ治馨酒の利見えて珠成		一一一一一一一一一一一 得友評六十二点 珠成 五十点 菊貫 三十六点 亀文 三十点 菊貫 二十六点 珠成		一七一七一一一 霞外子評五十九点 亀文 五十五点 亀文 三十二点 菊貫
一七一七一七一五五二五五五 孫の手染る米の一筆	菊貫	一一一一一一一一一一一 得器評六十四点 珠成 四十五点 菊貫 三十六点 位梅」52ウ		一七一七一一一 鶯嬌子評三十六点 亀文 三十三点 亀文 三十点 菊貫 二十六点 珠成
七七一三五十三三五七一十五一三一 人も又鯨捕る家の鰯ほと	梅足	一一一一一一一一一 志言子評四十点 亀文 二十点 菊貫 二十六点 亀文		一七一七一一一 松岡評五十八点 亀文 五十三点 梅足 四十点 菊貫
一十一一一一一一一一七一 しきりに眼氣大閑爐裏はた 環川		一一一一一一一 左簾評六十三点 菊貫 三十九点 亀文 二十六点 立葵		一七一七一一一 立志評七十三点 珠成 四十二点 環川 三十三点 亀文
一一一一一一一五一一五 訳もなく嘶上手の笑はせて 一步		一一一一一一一 古梁評五十点 菊貫 二十八点 珠成 二十点 立葵		一七一七一一一 松岡評五十八点 亀文 五十三点 梅足 四十点 立葵
一三五一七一七一「二十一一十 閏月には名の付ぬ雨	松岡	一一一一一一一 器觀評五十九点 亀文 五十三点 梅足 四十点 立葵	53才	一七一七一一一 紫鳳評四十二点 立葵 三十五点 松岡 三十四点 菊貫
		一一一一一一一 冬映評五十七点 亀文 四十三点 三十六点 菊貫		一七一七一一一 退住評四十九点 菊貫 四十八点 梅足 三十六点 松岡
		一一一一一一一 菊貫		
		一一一一一一一 梅足		
		一一一一一一一 松岡		

*本稿は、日本科学振興会の学術研究補助金による「基盤研究C」「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」（課題研究番号22520252 研究代表者玉城司）に基づく。